

メッセージアウトライン

ヤコブの手紙 1:5~8 「少しも疑わずに」

[5] 「あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます」

ここで言われている知恵とは能力、知識、才能という意味ではなく、神が与えてくださる知恵であり、人生に対する深い霊的洞察力と言えるもの。それによって自分の人生に対する試練の本当の意味を悟ることができるようになるのである。また知恵は私たちの人生において、何が善であり、悪であるのか、何が神のみこころであり、そうでないのか、何が正しいことであり、そうでないのかといったことについて判断させるものである。ソロモンは父ダビデに代わって王とされた時、神に求めたものは富でもなく、長寿でもなく、善悪を判断して民をさばくために聞き分ける心であった。神は彼の祈りを良しと認められ、知恵の心と判断する心をお与えになった。→ I 列王記 3:5~13 私たちも熱心にこの知恵を願い求めていく必要がある。そのようにしていく時、そこに人生の正しい意義を見出し、成熟したキリスト者となっていく道が開けていく。そしてこの知恵を願い求めるのには資格も条件も必要ではない。神は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになるお方なのである。

[6] 「ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです」

ここには願うことに関して、ただし書きが記されている。それは少しも疑わずに、信じて願うことである。なぜ、疑うことがいけないのか。それは相手を信用していないからである。神の約束のもとに立ちながら、実際はその約束が成就することを疑い、あるいは信じていないとするならば神はその人のことをなんとと思われるだろうか。ここではそのような人は「風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです」と言われている。

[7-8] 「そういう人は、主から何かをいただけるとってはなりません。そういうのは、二心のある人で、その歩む道のすべてに安定を欠いた人です」

もしも、このような人に何かの願いがかなうように見えることがあるとするならば、それは信仰が必要でないほどの、神の求めなくてもよいほどの、自力でできることであつたのであろう。銀行に預金があるならば、神に願わなくてもお金を手にすることができる。また、将軍は部下を思うままに動かすことができるであろう。このような類のことは信仰とは関係なしに行えることである。しかし、信仰者はその人生において常に神の国とその義とをまず第一に求めて生きる者である。→マタイ 6:33 そしてヘブル 11:6 には次のように書かれている。「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならぬのです」

さらにマルコ 9:14~27 参照。……問題は主イエスにできるかできないかではなく、この父親の不信仰にあった。

私たちも、主に本当に信仰を持って願うことをしないで、「もし、おできになるものなら」(22) と言っていることはないだろうか。

少しも疑わずに、信じて願うならば、きっと与えられる。私たちはこの約束を信じて願い求めよう。ただし悪い動機で願っても、受け入れられないということも知っておかなければならない。→ヤコブ 4:3

しかし、知恵を求めることは神のみこころにかなうことである。それによって、私たちは、やって来るさまざまな試練の意味を正しく悟り、判断し、忍耐しつつ成熟した信仰者となっていくことができるのである。